

小説に親しむ態度を養う入門指導

.....小説の続きを想像しよう.....

保戸塚 朗

△目次▽

- 1 教材を選ぶ
 - 2 小説教材を選ぶ
 - 3 この学習指導案について
 - 4 学習指導の実際
 - 5 考察
 - 6 まとめ
- (付録) 教材文

1 教材を選ぶ

教室で授業を行う際、我々はどのようにしてその素材となる教材作品を選択するだろうか。

もちろん、目の前には教科書があるのだから、その年に採用することになった教科書に目を通して一年間の指導計画を作成し、その過程で扱べき教材作品が具体的に浮かび上がってくるというのが一般だろう。(小学校の場合は、教科書の全教材をやることが前提になっているが、高等学校の場合、教科書の全教材をこなすことは、実質的に不可能である。)

ただ、私は、あまり「目の前の一冊の教科書」にこだわらないで年間指導計画を立てている。というのも、高等学校の場合、各科目について数多くの教科書が出版されているため、それらに共通して採用されている定番教材が存在する一方で、それぞれの教科書が独自に発掘した魅力的教材が、教科書ごとに分散して収録されているという事情があるからである。つまり、小

説教材に関しては、A社とB社の教科書に魅力的な作品が採録されており、一方、評論教材となると、C社とD社の教科書に優れた教材が選ばれているといった状況になっているのである。E社のこの小説とF社のあの小説、という場合もある。さらに、評論ともなれば、編集と検定の時間を経ることによって色褪せてしまった教科書教材よりも、雑誌や新聞の記事の中に、よりビビッドで教材性の高い文章を見つけることもあるわけである。

もちろん、これは、年間指導計画を立てるに当たって、自分の裁量が全面的に認められる場合の話であって、学年（あるいは学校）全体で指導計画を立て、それに合わせて足並みを揃えた指導をするような場合には、「目の前の一冊の教科書」の範囲を超えることは難しいだろう。ただ、それでも自分の裁量が認められる範囲で（例えば、補助教材を用意する場合など）、より適切な教材を見つめる努力は必要である。

このあたりは、やはり高校国語の特色である。小学校や中学校の場合に比較すると、より広い範囲からの教材化が可能であり、それ故に、どのような教材を、どのように配置するかという所にも、教員の力量の見せ所があると言える

のである。

ただし、それぞれの教科書には、それぞれのポリシーと教材の組み合わせ・流れがあるわけだから、安易に教材を抜き出して組み合わせることには慎重でありたい。また、抜き出すことによつて、かえつて毎年固定した教材しか扱わなくなつてしまふとしたら、本末転倒というものである。常に新しい実践を目指して、魅力ある教材を見つけるように心がけることを忘れてはならないだろう。

2 小説教材を選ぶ

さて、今、高等学校の場合は教材選択の幅が広いと述べたが、小説に関しては、教室の一般的な授業で扱う新しい教材を見つけ出すというのは、なかなか難しい作業である。長さの制約があり、生徒の興味・関心に訴える内容のもので、かつ、授業で扱う意義（後述）を備えた作品ともなると、そうめつたにお目に掛かれないからである。

その点、やはり教科書の教材はよく吟味され

ており、手引きや注をはじめとして、しつかりとした教材化がなされている。小説に関しては、教科書や副教材に収められている作品を読み比べ、目の前の生徒たちにふさわしいものを選択して、指導計画を立てるのが良さそうである。さて、その選択基準であるが、当然のことながら「授業で扱う（＝教室で読む）意義のある作品」ということになる。今、その要点を簡単に示せば、

- ① 小説を読む力が養える作品であること。
（読解力の養成）
- ② 目の前の生徒たちの興味・関心や感性に訴える内容の作品であること。（「既知」の深化）
- ③ 同時に、新たな興味・関心へと結びつく可能性のある作品であること。読書体験を広げることに関わりつく作品であること。（「未知」の開拓）
- ④ 教室でみんなで読むことにより、読みの深まり（広がり・豊かさ）が味わえる作品であること。（読みの深まり）

といったことになろうか。

この稿では、実践報告に重点を置いているので、詳しく述べる余裕はないが、例えば①の「小説を読む力」（読解力）とは、

ア 作品の世界を大づかみにする力（及び、それを発表する力）
イ 構成を読みとる力（及び、それを発表する力）
ウ 登場人物の描かれ方（人物像）を読みとる力（及び、それを発表する力）
エ 登場人物の心情を想像する力（及び、それを発表する力）
オ 特色ある表現を発見し、その内容と効果を考える力（及び、それを発表する力）
カ 以上をもとに、作品の内容を正確に読みとる力（及び、それを発表する力）

といったことを想定している。

また、④の「読みの深まり」ということについては、

○ 生徒・教員が、単にそれぞれの読みを示して終わるというのではなく、示された読みをもとにして、さらに各自の読みを確かめ

させる。

といった指導を目指すことを意図している。

新学習指導要領では、「詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め」ることが求められている。「詳細」が何を指すのかは難しいところであるが、生徒の読みを中心に据える授業を目標に、各自の教材との対話の過程を、順を追って教室全体で共有できるような指導計画を作成し、それを丁寧に実践すれば、指導要領の言うところの、「論理的に意見を述べる能力」や「適切に表現する能力」が養成され、さらにそれが「的確に読み取る能力」や「読書に親しむ態度」の育成にも結びついてゆくはずである。

さて、現任教（都立桐ヶ丘高等学校Ⅱ定時制単位制総合学科）の「国語Ⅰ」（一年次生向け）で昨年度扱った小説教材は以下のものである。（指導目標と指導内容を簡潔に示す。）

1 「卒業」（鷺沢萌） 4時間

- 小説に親しむ態度を養う。
- 結末を想像させる指導。

2 「火垂るの墓」（野坂昭如） 6時間

- 映像化された戦争文学に触れる。
- ビデオを補助利用した鑑賞指導。

3 「良識派」（安部公房） 1時間

- 寓話の想像力に触れる。
- 寓意を想像して書く指導。

4 「記念写真」（赤川次郎） 3時間

- 人物像を考え、心情を想像する。
- 読解指導。

5 「崖下の家」（川本三郎） 3時間

- 作品構造・表現を学ぶ。
- 読解指導。

6 「赤西蠣太」（志賀直哉） 3時間

- 読書への姿勢を養う。
- 感想文指導。

定時制単位制総合学科という本校の特色と、生徒の実状を踏まえて、現代の作品を中心に採り上げており、文学史的な展開に対する配慮は特にしていない。

ここでは、最初に扱った鷺沢萌「卒業」の指導案について述べてみたい。

3 この学習指導案について

「卒業」は、主人公珠美（高校三年生）の「卒業式」をめぐる成長の物語である。教科書ページにして8ページ強、珠美の視点で語られるストーリーは、父親の家出（女性連れ）という大事件（？）も日常性の中に解消してしまう軽さがミソで、大きな盛り上がりがあるわけではないが、平易で親しみやすい小説となっている。さて、この小説の最後は珠美の卒業式の場面となっている。父は、お気に入りグリーンのスーツを着て式に出席すると珠美に約束をしていたが、式の直前に女性とともに家出してしまい、不在である。一家の生活を支える母は、いつも多忙で出席できそうにない。姉の直美は、一見無関心である。誰も自分の卒業式に来るはずはないと、白けた気分で式に臨んでいたところ、珠美は保護者席にグリーンのスーツを着た人物を発見する。誰だろうと思つてよく見ると、なんとそれは、父のダブダブのスーツを着た姉の直美であつた。という風に話は展開する。

珠美の家族が印象的に紹介される中で、一読すると、珠美と父・母（特に父）をめぐる物語

のように読みとれるし、実際ほぼ全ての生徒がそのように読むのだが、実は、姉の直美が重要な役割を果たしており、それがこの結末の部分で明確になるのである。

そこで、この最後の卒業式の場面で、グリーンのスーツを着た人物が珠美の目に飛び込んでくる部分までを先ず生徒に示す。そして、そのグリーンのスーツを着ている人物が誰なのかを含めて後のストーリー展開を想像させ、その上で、もう一度登場人物、特に、姉の直美の描かれ方に注目させるのが、この指導案である。

一般の小説の授業では、一度作品を最後まで読んだ上で、もう一度細部を確かめながら読みを深め、おもしろさを味わうという方向をとる。生徒の読みは、その過程で深まってゆくわけである。ただし、入門期に扱ういわゆる易しめの教材では、最初に全体像を示してしまうと、読解の興味が薄れてしまう場合もある。

この指導案では、ポイントとなる結末の場面を示さないで想像させ、興味を持続させながら作品世界に積極的に入り込ませることで、作品に親しむ姿勢を引き出すように工夫した。（【指導目標①】）

同時に、その結末部分をきっかけにして、もう一度自分たちの読みを確かめさせ、しっかりとした読解が、新しい作品世界を生み出すこと（読みの深まり）を体験させようと意図したわけである。（【指導目標②】）

また、自分の想像と他の生徒の想像を比較すること、さらに、原作と比較することを通して、教室で小説を学ぶことの楽しさや意義を感じ取らせることも目標とした。（【指導目標③】）

なお、家族を扱う作品の場合、現実の生徒の家庭状況などに配慮することが求められる。教員と生徒、また、生徒どうしとの関係など、教室の雰囲気がある程度つかんでから扱う方が良いだろう。同時に、高校段階では、

- ① 小説が虚構であること（作品世界の対象化）、
 - ② その虚構をみんなで読み、自己の読みを客観的に捉えることで、自己の世界も広げられること（自己の対象化）
- といった点についても伝えるようにしたい。

4、学習指導の実際

【対象】 都立K高等学校 一年次生

二部（昼間部）「みんなの国語」（14名）

三部（夜間部）「みんなの国語」（8名）

【授業タイトル】 小説の続きを想像しよう。

【教材】 鷲沢萌「卒業」（プリント教材、桐原書店「展開国語I」より）

【指導目標】

- ① 小説に親しむ態度を養う。
- ② 小説を読む力を養う。
- ③ 読みを共有しあう楽しさを味わい、教室で小説を扱うことの意義を理解させる。

【時数】 四時間

【展開例】

〈導入〉

- 1 「生徒用テキスト1」を配布する。
 - 2 作者について、「便覧」で簡単に紹介する。
 - 3 範読する。
 - 4 各自黙読し、難しい語句を書き抜く。
 - 5 各自辞書で意味を確認する。
- * 何人かを指名して、書き抜いた語を挙げさせる。

〈展開1〉

- 1 登場人物を指摘させる。
- 2 職業などを確認しながら、現在の家族の状況

を考える。

△板書例▽

■登場人物

○父（利之）

- ・ 売れないイラストレーター
- ・ 家事担当
- ・ あっけらかん、悪びれない
- ・ 女性と家出（置き手紙）

○母

- ・ 事務所所有
- ・ 多忙

○珠美

- ・ 高校3年生
- ・ 身長一六七センチⅡ母に似た
- ・ 父が好き（性格的に似ている）
- ・ 毎日毎日テレビと雑誌

○姉（直美）

- ・ 大学の研究員
- ・ やせっぽちで体が小さい（身長一五二センチ）Ⅱ父から受け継ぐ
- ・ 本を読むか机にかじりついている

3 母の多忙さがよく表れている表現を抜き出す。

*（答）「コートを着て出かける用意をした

母が立ったまままでコーヒーを飲んでおり」

4 テキストの続きを想像してまとめる。

* 作家になったつもりで、作家の文体にも注意しながら続きを創作させる。

* 字数の制限などは特になし。

* うまくまとまらない場合は、ストーリー展開予想の箇条書きでも可とする。

* 授業終了時に回収する。

△展開2▽

1 生徒作品をプリントして配布し、感想を共有する。

* 印象に残った結末を、理由とともに挙げさせる。

* 教室の人間関係によっては、5〜6人でグループを作らせ、生徒のノートを回覧させてもよい。その際、匿名で1行ずつコメントを書かせるようにする。

2 教員の立場で講評する。

* 優れている作品を採り上げ、優れている点などを具体的に指摘する。

* 生徒作品としては

① 父が来ていた。

② 父が来ていたが「女」といっしょだった。

(↓悲しい)

③ 父が来ており、母もいっしょだった。

(↓うれしい)

④ 母が父の服を着て出席してくれた。

(↓うれしい)

といったパターンが多い。①では「もう一度驚いた」の説明に欠けることになる。姉の直美が登場するストーリーは、極めて少数である。

3 「生徒用テキスト2」を配布し、黙読する。

4 結末部分を読んだ感想を共有する。

* 何名か指名して、感想を発表させる。

〈展開3〉

1 最後の場面の登場人物が、姉の直美であることを確認する。

2 最初と最後の場面で、姉の直美が共通にしていることを指摘する。

* (答) 新聞を読んでいる。

3 直美は単に新聞を読んでいるだけなのか、考える。

* (答) 珠美のことを気にしている。(珠美の様子を聞いている存在)

4 直美が「聞く存在」であることが分かる場面を指摘する。

* (答) 同時通訳になりたいという珠美のつぶやきを聞いていた場面。

〈板書例〉

■直美の姿(「聞く存在」)

○最初の場面

↓新聞を読みながら、珠美のため息を聞いている。

○進路の話の場面

↓「同時通訳になりたい」という珠美のつぶやきを聞いている。

○朝の場面

↓新聞を読みながら、珠美と母のやりとりを聞いている。

5 スーツを着て来るのが直美であることを予感させる表現を抜き出す。

* 「やせっぽちで体の小さいところだけを父から受け継いだようである」

〈まとめ〉

1 「物語文」について説明する。

* 「物語文」とは、「…がくする物語」(主人公の行動をまとめる)、あるいは「…がくになる物語」(主人公の変化をまとめる)

というパターンで、その作品の概要をまとめた文を指す。「…」部分には、基本的には主人公が入るが、色々な登場人物を入れることで、さまざまな作品の捉え方が可能となる。

なお、「物語文」の入門書としては、石原千秋『小説入門のための高校入試国語』（NHKブックス、2002）が分かりやすい。

2 この小説の「物語文」を作成させる。

* 何人かを指名して例を示し、完成度の高いものを目指させる。

3 「物語文」を発表しあい、それぞれの読みを確認する。

△板書例▽

■「卒業」の物語文

- 珠美が成長する物語。
- 珠美が姉の思いを受けとめるようになる物語。
- 珠美があいまいな自分を卒業する物語。
- 珠美が父を卒業する物語。
- 直美の思いが珠美にやる気にさせる物語。

4 自己評価する。

【評価の観点】

- ① 積極的に結末を想像し、創作して、この作品に親しむことができたか。
- ② 直美の描かれ方を捉えることができたか。
- ③ 他の生徒の作品（結末・物語文）を共有する楽しさを味わえたか。

【生徒創作作品例】

（★は、他生徒のペンネーム入り一行感想。）

● Aさん作品

式が終わって、父のもとへ行くと、父はものすごい笑顔で珠美をむかえた。

「約束したから来たヨ！」と父は笑顔で珠美に言った。珠美は、

「帰ってきてくれたんだ。」と父に言うと、父は、

「ちがうんだ。卒業式に来たのは、最後に珠美との約束を守ろうと思って…。」と言い残して帰って行った。

それが父と最後に会って話した時間…。

その後も、珠美たちの前に、父と父の明るいグリーンのスーツは現れなかったとき。

★とても優しいお父さんですね。約束をちゃんと忘れずに来てくれたところに感

動しました。(のんピー)

● Bさん作品

スーツは一緒だが父ではなかった。そのスーツを着て立っていたのは珠美の母親だった。

何週間した後、ふらりと父は帰ってきた。珠美は父に裏切られたという気持ちから父を責め立てた。しかし「ごめんね、ごめんね。」という父を見て、また許してしまった。

珠美は短大に入学し、早くも二年の月日が流れた。卒業式をむかえた日、あの時の事を考えていた。珠美は驚いてハッと息をのんだ。父兄席にはひとときわ目立つグリーンのスーツを着た父が笑顔で珠美を見つめていた。

★私的に、すごいこの結末は好き！ 「ご

めんね、ごめんね。」ってところがいい。

でも、卒業式を迎えた日のことを考えていた：じゃなくて、「(例)写真を見ていた」の方が分かりやすいし、たしかかもしれない。(藍瀬加奈子でした。)

● Cさん作品

【その1】

お父さんのとなりには、今日仕事でこれないはずのお母さんがいたのだった。

「なんで？」

と思う気持ちは沢山あったが、それ以上に、すぐくすぐくうれしかった。

卒業式も終わり、帰り道にお父さんが一言ことう言ったのだった。

「珠美：。心配かけてゴメンな。これからはずっとお前達のそばにいるから。」

【その2】

お父さんのなりにいた人は、知らない女人：。私は心の中がぐちゃぐちゃになった。どうしていいかわからない。来てくれたのは嬉しいけど、知らない女の人は連れてきてほしくなかった：。

一度みんなだ教室に戻ったのち、お父さんがしに行つたが、父のすがたはなかった。

私は家に帰っても、この事は誰にも言わなかった。一つ言える事は、お父さん―「約束を守ってくれた。」―ということ。

【その3】

そのスーツを着ていたのは、朝「行けない。」と言っていたお母さんだった。お父さんがこれないとわかったので、仕事を切り上げて来てくれたのだった。

嬉しかったのだが、少し複雑だった。

あのスーツは、絶対お父さんに着てほしかった

たから。でも、その後一年、二年たってもお父さんは帰ってこなかった。

★これを読んでいる時の私も複雑な気持ちだったけど、せめてお母さんが来てくれた事がすごくよかったなあうって思いました。(L.A)

●Dさん作品

父のとなりに女性がいたのだ。あわいブルーのスーツを着ていた女性は、母だった。

その日、私は家でこんなことを聞かされた。父は今、イラストレーターの仕事を再開して、他の女性と暮らしているという。そして、その女性は、父の母、つまり私の祖母だった。イラストレーターの仕事が成功すれば、家に帰ってくるという。

今の私は、それを楽しみにしている。

★私と少し似ているけど、すごくほのぼのとしました。(あき)

5 考察

この指導案の根本的な指導目標は、結末を想

像することによって、つまり、積極的に作品と関わることによつて、小説に親しむ態度を養うことであつた。

生徒はその創作に積極的に取り組み、【生徒創作作品例】に示したように、幾通りかの結末を考えて提出する者もいた。また、原作作品の結末をプリントして渡すと、感想を述べあいながら、熱心に読みとつていた。その意味で、【指導目標①】は達成できたのではないかと思われる。

同時に、読みを共有しあうことで、教室で小説を読む楽しさを味わわせることも目標にした。教室の人間関係がある程度できた時期だったので、創作の後はノートを回覧させ、一行感想を書かせるようにした(感想には、匿名を付させた)。14名のクラスでは、全員で全員分を回覧する時間がなかったが、8名のクラスでは、全員で全員のノートを回覧し、その結果、自分以外の7名の感想が自分のノートに記されることとなった。

その後、これらの一行感想も含めてプリントし、改めて読みを共有するようにした。このプリントも、配布と同時に各生徒は熱心に読み、いつもよりも活発に感想を交換することができ

た。後の「物語文」作成においても、友人のものを積極的にメモするなど、読みを共有し、それを自分の読みと比較しようとする姿勢が見られた。【指導目標③】も概ね達成できたと言えるよう。

なお、今回の実践では扱わなかったが、人気の高かった生徒作品をもとにして、クラス全員で一つの結末ストーリーを作成するといった活動を計画することも可能だろう。

結末を想像させると、ほとんどの生徒は、グリーンのスーツを着てきた人物を、珠美の父あるいは母と想像する。これが生徒の最初の読みである。

しかし、作品に描かれた結末では直美が登場し、生徒にとってはそれが最初の驚きとなる。生徒たちは、親子をめぐるストーリーにはある程度慣れているが、兄弟（姉妹）をめぐるストーリーにはあまり慣れていないのだろう。初めの読みには、そのような生徒たちの日常が反映されているのである。（なお、詳述する余裕はないが、読解指導の過程で、そのような生徒たちの日常的な発想の枠を、想像力を働かせることによって乗り越えることも、重要な指導目標

となる。）

そこで、読解指導としては、直美の描かれ方を中心に読み返すことになる。すると、実は珠美と直美の交流が丁寧に描きこまれていることが分かってくる（4、学習指導の実際 展開 3 Vの項参照）。そして、生徒たちは、この小説が珠美と直美の物語であることを発見するのである。（読みの深まり）

最初の小説教材でもあり、この読解指導の部分では教員側が主導することになったが、まとめの段階で「物語文」を作成させたところ、この作品が珠美の成長物語であり、そこに姉直美が大きく関わっていることをしっかりと捉えているものがほとんどであった。【指導目標②】もほぼ到達できたと言えるだろう。

なお、創作活動そのものについては、簡単に講評しただけで、十分な指導をしていないが、学習意欲の高いクラスであれば、「書くこと」の指導も指導目標の中にしつかりと位置づけ、より丁寧な作業を課すことも可能である。

6 まとめ

この指導案は入門期のものであり、「小説に親しむ態度を養う」という点を中心に述べたが、「続きを想像して創作させる」指導には、次のような特色も考えられる。

- ① 読みに対する積極的姿勢が養える。
- ② 易しめの作品においては、興味の持続が可能となる。
- ③ 難しめの作品においては、短く区切ること、取り組みやすい教材として提示することができるとができる。
- ④ 続きを想像する際、その根拠となる表現を指摘させることで、伏線に対する理解が深められる。
- ⑤ 続きを書くという目的を持って伏線を読みとらせることで、戦略を意識した読解の姿勢を引き出すことができる。(例えば、線を引かせたり、メモを取らせたりしながら読ませる、など)
- ⑥ 自分の想像と他生徒の作品、そして原作そのものと比較することで、想像力の広がり

を実感をもって味わうことができるとともに、読解が深められる。

例えば、③を生かした実践例としては、中島

敦「名人伝」などが挙げられる。概略を示せば、

○プリント1 || 主人公紀昌が師の飛衛のもとで修行を重ね、「よからぬ考え」を持つようになるまで。(「よからぬ考え」とは何かを想像させて、続きを書かせる。)

○プリント2 || 甘蠅老師が「不射の射」を示す前まで。(「不射の射」とは何かを想像させて、続きを書かせる。)

○プリント3 || 紀昌がある「逸話」を残して死去するまで。(死ぬ直前の「逸話」とは何かを想像させて、続きを書かせる。)

○プリント4 || 最後まで。

と4回に分けて本文を提示し、生徒の創作作品もプリントしながら読み進めてゆくのである。ストーリーはおもしろいが、漢文的な表現に抵抗感を感じさせがちな中島作品も、短く区切りながら続きを想像させると、表現面での抵抗感が減り、ストーリーに対する興味を喚起できるので、より積極的な取り組み姿勢を引き出すことが可能となるのである。

「続きを想像して創作させる」ためには、当然それにふさわしい作品を選ぶことが必要である。一生懸命想像したわりに、作品の結末が単純でおもしろくないというのでは、逆効果になってしまうからである。

例えば、定番教材の「山月記」は、「名人伝」とは逆に、このような指導には向かないだろう。一方、挑戦したことはないが、同じ定番教材の「羅生門」ならうまくいくかも知れない。場面の展開にそって、下人の行動を想像させることなどが考えられよう。(ただし、かなり学習意欲のある生徒たちに対して行わないと、学習のまとめ段階が難しくなりそうな気もするが…)。

こうしてみると、結局話は元に戻るが、教材選択の話となるわけである。

何を指導目標とするのか。そして、その目標を達成するためには、どのような教材を用い、どのような料理したらよいのか。それを常に実践の念頭に置くことが重要であろう。

そして、その根底には、繰り返すが、年間指導計画を明確化することが求められる。

○目の前の生徒たちに必要とされる学力は何

なのか(指導目標)

○それを養うには、どのような指導が必要か(指導内容)

○何を題材にして、どの程度の時間をかけるのか(教材と時数)

○他科目との連携をどうはかるか(指導の系統性)

といったことを意識しながら、日々の実践に取り組みたい。

付録 教材文

プリント教材を利用するが、結末を想像させるには、当然ながら(全体を見渡せしめよう教科書ではなく)プリントの方が都合がよい。最初に配布するプリントでは、結末部をカットしてあり、展開の最終段階で結末部を配布するという手順を踏む。

なお、この教材文は、桐原書店「展開国語Ⅰ」に掲載されている本文をもとにした。

●生徒用テキスト1 当初配布用

(作品冒頭) 「笑顔を作りかけてそちらのほうをよく見たとき、珠美はもう一度驚いた。」

●生徒用テキスト2 11まとめ時配布用

(テキスト1 続き) (終わり)

「卒業」

鷺沢萌

(▼生徒用テキスト1 はじめ)

「あーあア。」

早春の日ざしが白い革張りのソファーに映っている。半円形に張り出した形で作られた居間の中で、ソファーの上に一六七センチの細長い体躯を投げ出すと、下から見上げる部屋の感じはいつもとは少し違って見える。大きくため息をついた珠美は、ソファーの上であおむけに寝転がったまま膝を立てて脚を組んだ。広い居間の向こう側、大きなテレビの前で、姉の直美は正座したまま上半身だけ前方に折り曲げた格好で、さつきから熱心に新聞を読んでいる。

「あーあア。」

珠美がもう一度ため息をつくとき、ソファーの陰で姉の体がぴくりと動いた。直美は猫のあくびのような姿勢のまま、顔だけこちらに向けてぷつりと言った。

「何があーあア、よ。」

「べえつにイ。」

珠美は顔を背けるようにして、再び窓の外を見つめた。

半円形の居間の壁面いっぱいガラス窓にしたのは母である。この家が建ったのはもう六、七年前、珠美はまだ小学生だったが、それでも建築屋や設計士との打ち合わせ、出来上がってきた図面にさまざま注文をつけて変更をさせたりしたのはすべて母であったことは覚えてい

る。半円形の窓に沿わせて置いてある白い革のソファーは西ドイツ製とかで、日本には十組くらいしかないのだという。これも麻布の店で母が見つけてきた。

あのころ珠美は、子供の自分ですらワクワクするような家をつくるという計画に、どうして父が参加しないのか不思議でならなかった。母が父にそうさせないというのではなかった。子

供の目から見ても、父は自分からそれを放棄していた。

けれど高校の卒業式を明日に控えた今は、珠美にもあのころの父の気持ちが変わる。この家は、紛れもなく母が建てた、母の家なのである。

幼いころから自分の家はどうもよその家とは違うようだ、くらいの認識はあった。朝早く仕事に出かけていく母と、娘たちのために食事を作り、洗濯をし、掃除をする父。父は売れないイラストレーターだった。

それでも珠美たちがまだ小さかったころは、父もわずかずつではあるが仕事をしていた。それはとても一家四人を支えられるほどの収入にはならなかったが、しかし父が絵を描いているとき、母はどことなくうれしそうだった。

珠美たちが成長するにつれて、母の仕事は飛躍的に成功し、自分の事務所を持つまでになった。家も建った。そうして父は、だんだん仕事をしなくなつた。

珠美は父が好きだった。背の高いところだけは母に似たが、性格的には父に似ているように思う。父のあつけらかなところ、悪びれないところが好きだった。

父には、どんな悪いことをされても「ごめん

ね、ごめんね。」と片手拝みの笑顔で言われると、「しようがないなあ。」と許してあげたくなくなるような、そんな魅力があった。

姉の直美は珠美とは逆に、やせっぽちで体の小さなところだけを父から受け継いだようである。身長は一五二センチで止まったまま脳みそだけいちぢな発育を遂げ、去年大学院を出て今は研究員として母校に勤めている。姉はおそらく、嫌っていたとまでは言わないまでも、父を苦々しい思いで見ているのではないかと珠美は思う。父が何か問題を起こしたとき――例えば酔っぱらい運転でトラ箱に入ったりしたとき――家族の対応は三人三様だった。まったく冷静に振る舞う母、ただただ心配してうろたえる珠美、そして怒りまくる姉の直美。――まったくもう、利之サンは。直美はそんなふうにも、父を名前で呼んだ。

その父が、二週間前にいなくなつた。置き手紙などという陳腐なものを残して、突然家を出てしまった。これを思うとさすがの珠美も腹立たしくなるのだが、女の人といっしょだったらしい。

父がいなくなつても、家の中にはなんの変化も起きなかった。母は相変わらず仕事に忙しい

し、直美は本を読んでいるか机にかじりついて
いるかのどちらかである。学校はとくに休み
になっている珠美はというと、卒業式に備えて
クリーニングに出しておいた制服が戻ってくる
と後はもうすることもなく、毎日毎日テレビを
見たり雑誌をめくったりしていた。

姉の直美はそんな珠美を時々しかりつける。

「あんた卒業したらどうするつもりなの。」

「別に……。短大はエスカレーターだし。」

「あんたね、目標ってものはないの。」

「：ない。」

すると直美はいらいらした調子でまくしたて
る。目標がないということとは人間をだめにする。
どんなことでもいいから目標を持ちなさい。

姉は一度、語学関係の専門学校や留学コース
のパンフレットをどっさり家に持ち帰ったこと
があった。ずっと以前に、珠美がぼんやりと「あ
たし同時通訳っていうのになりたいなあ……。」
とつぶやいたのを覚えていたらしい。それはた
だ単に、そのときちょうどテレビに出ていた同
時通訳の女性かキレイでカッコよかったから、
というだけのことだったのだが。

しかし直美は言う。

「キツカケはどんなことでもいいんです。あ

んな短大に行くくらいなら、何年間か外国で暮
らしてみなさい。」

珠美は心の中で「耳にタコができてその上に
またタコができた……。」とつぶやきながら、不
機嫌な顔で自分の部屋に引き揚げる。自分の進
路のことなどよりも、父がいなくなったという
のにどうして母も姉もあんなに平然としている
んだらうと考える。

父の失踪に関しては、珠美には特別に腹立ち
を覚える一つの理由があった。

父は年が明けてまもなく、スーツを新調した
のである。光沢のあるグリーンの生地は、成金
趣味とも言えるようなものであったが、いかに
も父らしいと思っただけで珠美はなんとなく愉快だっ
た。父自身もまた、そのスーツをえらく気に入
っていて、にこにこしながら「いつ着ようか。」
と言っていた。

母や姉はそんな父をあきれ顔で見ているが、
父は子供のようにはしゃいでいて、なんだかか
わいかった。だから珠美は言ったのだ。

「パパ、それあたしの卒業式のとくに着て来
てよ。」

父は一瞬、驚いた顔で珠美を見て、そして言
った。

— いいの？

— え？

— いいの？ こんな派手なので行っても…。

珠美が笑ってうなずくと、父もうれしそうな顔になって言ったのである。

— じゃあ、そうしようか。

それなのに父は、珠美の卒業式を待たずに「家出」してしまった。せっかく新調したスーツも持たずに。それは珠美に対する裏切りのように思える。家出はしかたがないこととしても、二週間くらい待ってくれてもよいではないかという気がする。

しよせん、父にとってはこの家も珠美も、たいたしたものではなかったのかもしれない。そう考えるとひどく寂しい。

翌朝起きて階下へ降りていく途中、ふと、父が帰って来ているのではないかという気がした。いつもの笑顔で「ごめんね、ごめんね。」と言いながら、食卓についているのではないか。そして父は言うのだ。

— 卒業式、今日だったよね。

しかしダイニングに入ったとたん、その空想ははかなく消えた。コートを着て出かける用意をした母が立ったまままでコーヒースを飲んでおり、

まだガウンを着ている直美はテーブルに新聞を広げていた。

「ごめん珠美、今日行けそうもないの。」

母が出かけ際に慌ただしく言った。

「うん、いいよ別に。」

小学校も中学校も、卒業式に母は来られなかった。その母の多忙のおかげで珠美たちは生活ができるのだから、文句を言える筋合いではない。

卒業式はつつがなく終わった。何人かの同級生は泣いていたが、クラスのほぼ全員は持ち上がり短大に進むわけで別れを惜しむということもない。珠美はしらけていた。

講堂から退場するとき、父兄席のわきの通路を並んで歩きながら、ぼんやりと周囲を見渡した珠美は、ハツと息をのんだ。

ダークグレーや黒い色が大半を占める父兄席の中に、ひととき目立つ明るいグリーンを見つけたのだ。

— やっぱり来てくれたんだ。

笑顔を作りかけてそちらのほうをよく見たとき、珠美はもう一度驚いた。

（▼生徒用テキスト2 はじめ）

グリーンのスーツを着ているのは父ではなかった。だぶだぶの上着のそでをまくり、ズボンのすそも折り曲げてそのスーツを着ている人は直美だった。

金ぶちの眼鏡をかけ、仏頂面とさえ言えるような表情で投げやりな拍手をしている直美のほうに、珠美の視線は釘付けになった。半ば口を開いたままで退場する珠美を、直美は苦々しい表情になって見つめ、身ぶり手ぶりで「口を閉じて前を向け」と知らせた。

講堂から出ると、たまらない可笑しさが込み上げ、珠美は思わずプツと吹き出した。泣き顔のクラスメートが驚いて珠美のほうを振り返った。珠美は慌てて笑いを飲み込み、チャップリンを彷彿させるような姉の背広姿をもう一度胸に描いた。

—頑張つて同時通訳になろうか…。

今度心の中でつぶやいた言葉には、数年前テレビを見ながらぼんやりとつぶやいた同じ言葉よりは重みがあるようだった。

（▼生徒用テキスト2 おわり）

（以上）

（後記）拙稿完成後、「月刊国語教育研究」（三六三、二〇〇二年七月号）が届いたが、その中の『読む楽しさを体感させる』ための読書指導」（吉田茂樹先生）は、椎名誠「散髪」を題材にした、ほぼ同じ方向を目指した実践報告である。生徒の現状分析やロール・テイキングなど、この論では触れられなかった点が指摘されており、大変参考になる。